

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00745

研究課題名（和文）大興安嶺北部両麓における古代～中世の境界域に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Research on the Ancient-Medieval Boundary Areas at the Northern
Foots of Daxing'anling

研究代表者

木山 克彦（KIYAMA, KATSUHIKO）

東海大学・清水教養教育センター・講師

研究者番号：20507248

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、匈奴、鮮卑、柔然、突厥、ウイグルがモンゴル高原で覇を称えていた時期を対象に、大興安嶺北部両麓の考古学的諸文化の再検討と現地発掘調査を行い、各時代における地域集団の様相と交渉関係、各国家からの影響の在り方、また次代への継承関係がどのようなものであったかを考古学的に提示することを目的としたものである。

研究の結果、当該地域の各時期の地域性と継承性、隣接地域間での交渉関係の一端を明らかにすることができた。またモンゴル東部での現地調査で、新規遺跡を多く発見できた。また発掘調査によって、匈奴の製鉄遺跡とウイグル可汗国の地方官衙の存在とその内容を明らかにできたことは大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大興安嶺は、西部は草原性、北部及び東部は森林性となる生態系の境界である。当地域の歴史研究は、草原地帯と森林地帯に分けられて研究されてきたが、両者は密接に連関して歴史展開を遂げている。本研究の成果は、これまで等閑視されてきた草原-森林の東西交渉史に一定の意義を齎すものである。また当地域の歴史叙述は、主に中国の史書を拠り所としてきた。その記録内容の重要性は疑いないが、分量が少なく、かつ中華思想の観点から記載されたものである為、当時の社会の実態や集団関係の動態を知る上で十分ではない。考古学的手法によって導出された当地域の古代～中世の様相は、今後の当地域研究の基礎となるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study aims to present archaeological aspects of the northern foot of Daxing'anling through a review of the archaeological cultures of the northern foot of Daxing'anling and field excavations during the period when the Xiongnu, Sunbei, Rouran, old Turk, and Uighur reigned on the Mongolian plateau.

As a result of the research, we were able to clarify the regional and inheritance characteristics of each period in the region, as well as some aspects of the negotiation relationships among adjacent regions. In addition, field research in eastern Mongolia revealed many new archaeological sites. Especially, the excavation of the Xiongnu iron site and the Uyghur Kahan State's local government offices yielded many results.

研究分野：北東アジア考古学

キーワード：大興安嶺 ウイグル可汗国 室韋 靺鞨 城郭

1. 研究当初の背景

本研究は、大興安嶺北部両麓地域における集団の統合、瓦解、再編の過程と周辺国家からの影響について、主に考古資料と史料の検討から、実証的に跡付けることを目的としたものである。本研究開始当初の研究背景や具体的意義は以下の通りに設定した。

(1) 大興安嶺は、西部は草原性、北部及び東部は森林性となる生態系の境界である。この生態系の差を反映し、前者では遊牧を、後者では狩猟採集農耕を基盤とする諸集団が形成されてきた。一方、境界域であるが故に、異なる生業集団間での交渉が行われる窓口ともなってきた。当地域の歴史研究は、草原地帯と森林地帯に分けられて研究されてきたが、両者は閉じた社会ではなく、密接に関連して歴史展開を遂げている。これまで等閑視されてきた草原 - 森林の東西交渉史に着目したものである。

また現在のロシア、中国、モンゴルの国境地域にあたるが、古代以来、モンゴル高原・中原・満州で興起した諸国家、支配集団の境界・辺境でもある。但し、単なる辺境ではなく、北魏を建てた拓跋鮮卑、モンゴル帝国の核集団となる蒙兀室韋を輩出した集団を醸成した地域であり、当地域は北東アジア史において重要な意味を持っている。

(2) 当地域の歴史叙述は、主に中国の史書を拠り所としてきた。その記録内容の重要性は疑いないが、分量が少なく、かつ中華思想の観点から記載されたものである為、当時の社会の実態や集団関係の動態を知る上で十分ではない。古代以来、数多現れた族集団とその内部の実態、相互関係、周辺地域との関係性を具体的に跡付ける為には、物質資料分析に基づいた考古学的研究手法からの歴史叙述が重要となってくる。

(3) 対象とする考古資料は、ロシアと中国、モンゴルにあり、政治情勢から長くその情報は限られてきた。提示される諸文化の内容は、概要的なもので十分な検討が行われたとは言い難い。また各国とも自国の研究成果に偏重する傾向が長く続いており、地域を越えて古代来の集団の実態とその推移を具体的に明らかにしたものは極めて少ない。そして、現在求められている研究は、基礎的だが、ロシアと中国、モンゴルの各研究機関に蓄積されている各資料を実見した上で、中立的な立場に立ち、各文化の内容を整理し、当地域の全体像を提示することである。この点が本研究の特色である。

2. 研究の目的

本研究では、匈奴、鮮卑、柔然、突厥、ウイグルがモンゴル高原で覇を称えていた時期を対象に、大興安嶺北部両麓の考古学的諸文化の再検討と現地発掘調査を行い、各時代における地域集団の様相と交渉関係、各国家からの影響の在り方、また次代への継承関係がどのようなものであったかを考古学的に提示する。そして、匈奴から唐代における当地域に関する史料と先行研究の再検討を行い、考古学的様相との比較検討から、当地域の歴史展開を復元することを本研究の目的とした。

具体的な目的は以下の通りである

(1) 大興安嶺北部両麓の土器資料を中心とした考古学的諸文化の再検討を行う。本研究では、

土器群を主な分析対象とする。これは広域な研究対象に対して、質・量ともに分析に耐え、かつ可塑性の高さから地域伝統の把握と地域間関係を捉えうる資料だからである。また当地域では、他の考古遺物に対する検討を実践する上でも不可欠な広域の土器編年すら存在しないことが大きな問題であり、その確立が急務だったためである。

(2) また特に資料が乏しいモンゴル東部地域では、発掘調査と踏査を実施し、資料増加を図り、当地域の様相を明確化する。以上の検討から、各時期・通時的な地域間関係を明らかとする。また広域編年の構築を行う。

(3) 匈奴から唐代における当地域に関する史料の分析を実施し、上記の研究で得られた考古学的様相と比較検討を行い、当地域の総合的な歴史展開の復元を目指した。

3. 研究の方法

上記の目的達成の為に実施した研究は、以下の通りである。

(1) 資料分析：主に土器を分析対象とした。匈奴以降、ウイグル可汗国期併行の各文化の資料を検討対象とした。ロシア、中国、モンゴルの各研究機関に所蔵されている資料を対象とし、現地に赴き、分析を行った。分析の手順は以下の通りとした。1. 資料は膨大にある為、まず良好な資料の纏まりのある遺跡を選定し、施文技術を含む文様や成形技法、胎土の製作を含む器形等の諸属性を観察し、各文化・地域の土器群の構成を明らかとする。2. 各期で同様の分析を行い、各地域での土器の変遷過程と土器製作技術の系統関係を把握する。3. 地域間での技術伝統を比較し、結果、得られた地域間の共通性と差異を土器製作技術における情報伝播の多寡を反映したものと見做し、通時的な地域間関係を把握する。

(2) モンゴル東部での発掘調査・踏査：モンゴル東部のオルズ川流域で調査を行った。オルズ川流域の調査は、文字通り皆無であった。遺跡分布調査と発掘調査によって、当流域の古代から中世までの各時期の特徴を把握することにした。発掘調査を実施したのは、匈奴の製鉄遺跡であるズーン・ウリン・アダグ遺跡とウイグル可汗国期にあたるシャルツ・オール1遺跡とした。

(3) 史料検討：匈奴～唐代にかけての当地域に関する史書の記述・先行研究を纏め、データベースを作成するとともに再検討を行う。史料からみた当地域の展開を検討する。

以上、考古学的諸文化の再検討し、内在する時系列的な地域伝統と地域間を繋ぐ関係性を紐解き、史料背景を加味しながら、同地域の歴史的展開を復元する。あわせて同地域の広域編年の提示を行う。

4. 研究成果

(1) 資料分析：研究計画に従い、ロシア連邦では、アムール州博物館、ブラゴベシエンスク教育大学で、中国では、内蒙古博物院を中心とした呼和浩特周辺の各機関で資料分析を行った。また国内では東京大学が戦前に行った当該地域資料を有していたため、その資料調査を行った。ロシア連邦のザバイカル州、中国内蒙古自治区のハイラル高原における関連資料の分析を計画していたが、世界的な新型コロナウイルスの蔓延の為、現地に渡航しての資料分析はできなかった。

その代替策として、公刊物として公表されている資料を渉猟し、分析を加えた。

結果、紀元前後～9世紀代の大興安嶺北部両麓地域における諸文化の土器編年の基礎を示し、それぞれの地域における各時代の地域的特徴と通時的系統性、隣接地域との交渉関係に関する見通しを提示することが出来た。特に大興安嶺西部地域では、拓跋鮮卑の資料特徴を把握し、これらが室韋に続く可能性を見だし、また8世紀代に大興安嶺北部両麓で交渉関係の高まりが指摘できたことは非常に大きな成果といえる。

(2) モンゴル東部での発掘調査・踏査：オルズ川流域の現地調査を中心に実施した。新石器時代から8世紀代の10数遺跡を新規発見することが出来た。同流域は文字通りこれまで調査されていない地域であったため、非常に重要な成果であった。発掘調査では、匈奴時代の製鉄遺跡であるズーン・ウリーン・アダグ遺跡、当初唐代併行と考えられたシャルツ・オール1遺跡の発掘調査を実施した。ズーン・ウリーン・アダグ遺跡では、4基の製鉄址を発見できた。その構造はモンゴル高原中央部の匈奴に典型的なものであり、匈奴の東端である当該地域までその勢力がきっちりと及んでいることが明らかとなった。また製鉄址に近接した円形の作業場ないし住居を確認した。製鉄炉と作業空間の関係を明らかかな例は、本例が初めてであり、非常に重要な成果を挙げることが出来た。

シャルツ・オール1遺跡の調査では、中央基壇を中心に発掘調査を進めた。出土した瓦の特徴から、ウイグル可汗国期前半であることが明らかになった。中央基壇の構造を解明するとともに、城壁との位置関係も把握し、その設計についても推定復元することができた。遺跡は、唐尺を利用した唐の技術による建築であるものの、東正面をする構造であり、中原の技術を移入するものの、草率的嗜好も取り入れていることが判明した。(1)の成果を加味しながら、同地域の室韋を抑える為の地方官衙であり、室韋から大興安嶺東部地域に居住する靺鞨への交通路を抑えるための機能も担っているものと想定できた。

発掘調査を継続し、同遺跡の詳細を把握する予定であったが、世界的な新型コロナウイルスの蔓延の為、現地に渡航しての調査は中断せざるを得なくなった。

(3) 漢代併行、唐代併行を中心にモンゴル東部地域の史書の記載と研究史を渉猟し、モンゴル東部地域の歴史的な位置及び、上記のシャルツ・オール1遺跡の史書から見た位置付けを検討した。前者については、一定度の成果を挙げ、当該地域を起源とする拓跋鮮卑の南下、代国、北魏建国は神話に過ぎないのではないかと、という説を提示することができた。後者については、史書に記載された施設との同定にいたることは無かった。おそらくは史書に記載されるものではなかったものと考えられる。この点からもウイグル可汗国と併行する唐の直接設置機関ではなかったろうと推測された。

世界的な新型コロナウイルスの蔓延により、現地調査の中断があったものの、本研究は先行研究にない、非常に多くの成果を挙げることが出来ている。上記の通り、考古諸文化の再検討で一定の成果を挙げたが、未だ見通しの段階である。今後、資料分析の質・量をより充実させ、地域毎に資料の詳細を整理し、内在する時系列的な地域伝統と地域間を繋ぐ関係性を紐解き、歴史背景を加味しながら、地域集団の動向と地域間関係の推移を復元する必要がある。また、現地発掘

調査・踏査でも非常に多くの成果を挙げた。今後も継続的な調査によって全容を解明することが望ましい。しかしながら、当面は、シャルツ・オール1遺跡に集中する。シャルツ・オール1遺跡は小型とはいえ、全容を把握するための調査となれば、2遺跡を併行させた発掘調査の実施は、経費・時間ともに困難である。同遺跡の調査によって得られる内容は、瓦製作技術復元や、瓦当編年の確立、唐とウイグル可汗国との間にある技術移入の様相復元、城郭の機能、外敵室韋との関係、更に東方森林世界との関係と、多岐に渡り、当地域研究の核となる。発掘調査する遺跡は限定するが、調査内容や比較対象は広がり、必要な調査体制や日数等を見直したところ、本研究よりも経費がかかることが判明したことから、基盤研究(A)に申請、採択されたため、本研究計画は途中辞退するが、本研究内容は発展させて以後継続していくこととした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 11件）

1. 発表者名 Kiyama K., Ishtseren L., Sasada T., Sagawa M., Osawa T., Shoji T., Amgalantugs T., Munkhbayar L., Erdene, B.
2. 発表標題 Japan- Mongol Joint field research at the Ulz river in Northeastern Mongol.
3. 学会等名 .(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐川正敏・白杵勲・木山克彦・A.恩福特爾・G.耶勒格真・L.意史策仁
2. 発表標題 匈奴至契丹遼時期城址和瓦磚窯址等の日蒙合作発掘和研究与其和漢宋時期的对比研究
3. 学会等名 第三届“世界考古論壇・上海（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 .
2. 発表標題
3. 学会等名 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 et al.
2. 発表標題 ” 2019 m
3. 学会等名 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐川正敏・木山克彦・正司哲朗・臼杵勲・笹田朋孝・L.イシツェレン
2. 発表標題 モンゴル国ドルノド県シャルツ・オール1遺跡の調査
3. 学会等名 日本中国考古学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 臼杵勲、内田宏美、木山克彦、佐川正敏、柳本照男、Ch.アマルトゥフシン
2. 発表標題 2019年度ホスティン・ボラグ遺跡群（KBS3・4遺跡）発掘調査概要報告
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木山克彦・佐川正敏・臼杵勲・正司哲朗・笹田朋孝・L.イシツェレン
2. 発表標題 2019年モンゴル国オルズ川流域の考古学調査
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好佑佳・正司哲朗・佐川正敏・木山克彦・L.イシツェレン
2. 発表標題 ウイグル時代前期の地方官衙から出土した瓦の同范判定手法に関する考察
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木山克彦
2. 発表標題 モンゴル草原の城郭調査 - ウイグル可汗国・契丹の城郭遺跡
3. 学会等名 愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター第28回アジア歴史講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 ： （国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamaya Fumito・Kiyama Katsuhiko
2. 発表標題 Perforated Whetstones in the Okhotsk Culture
3. 学会等名 ： （国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Usuki Isao・Kiyama Katsuhiko
2. 発表標題 Features of Kilns of Xiongnu and Khitan in Mongolia
3. 学会等名 SEAA8（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kiyama Katsuhiko・Sagawa Masatoshi
2. 発表標題 Features of Xiongnu Pottery and Roof tile in Mongolia
3. 学会等名 SEAA8 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白杵勲・佐川正敏・木山克彦・柳本照男・松下憲一 (原題はモンゴル語表記)
2. 発表標題
3. 学会等名 匈奴の都市及び生産史の諸問題 (原題はモンゴル語) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白杵勲・佐川正敏・柳本照男・木山克彦・内田宏実・正司哲朗・Ch. アマルトゥフシン
2. 発表標題 匈奴の瓦セン生産と供給および秦漢との比較研究-モンゴル国ホスティンボラグ第3遺跡1号窯跡の調査-
3. 学会等名 日本中国考古学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 T.SASADA・L. Ishtseren
2. 発表標題 Iron Smelting in Khustyn Bulag site
3. 学会等名 International Conference "Xiongnu Settlement and History of Ancient Craft Production" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹田朋孝
2. 発表標題 南アジアにおける製鉄技術の特色ーアジアの製鉄技術史の視座からー
3. 学会等名 国際シンポジウム「南アジアの鉄器時代」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福田正宏・M.Gablirchuk・國木田大・田尻義了・M.Gorshkov・江田真毅・木山克彦・A.Malyavin・夏木大吾・足立達朗・張恩恵・太田圭・田邊えり・熊木俊朗
2. 発表標題 ロシア・ユダヤ人自治州における考古学的調査(2017・2018年度)
3. 学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木山克彦・L.イシツェレン・笹田朋孝・佐川正敏・大澤孝・正司哲朗・T.アムガラントクス・L.ムンフバヤル・N.ナムダク
2. 発表標題 2018年モンゴル国オルズ川流域の考古学調査
3. 学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹田朋孝・L.イシツェレン・G.ガルダン・正司哲朗
2. 発表標題 モンゴル国トゥヴ県ホスティン・ボラグ4遺跡の調査報告ー匈奴の竪穴建物の調査ー
3. 学会等名 第20回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 著者名 津田資久・井ノ口哲也（編著）・渡邊英幸・水間大輔・松下憲一・森田美樹・小笠原淳・小野寺史郎・渡辺健哉・小川快之・江川式部・宮崎聖明・森平崇文	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 372 (111-134)
3. 書名 教養の中国史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松下 憲一 (Matsushita Kenichi) (60344537)	愛知学院大学・文学部・教授 (33902)	
研究分担者	笹田 朋孝 (Sasada Tomotaka) (90508764)	愛媛大学・法文学部・准教授 (16301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------